町家のタイプとその空中写真判読*

—仙台とその周辺の例から—

杉 浦 直・立 川 稔 士

本論で、我々は、町家のタイプについて論じ、それを空中写真によって判読することを試みた。また、併せて、従来その例が少ないと思われる町家形態（さらには民家形態）の空中写真判読の諸問題を検討した。

1 町家のタイプについて

「町家（まちや）」という語の定義は、あまりはっきりしていない¹⁾が、一般には「農村の民家」に対する「マチバ（都市部）の民家」を指すと考えられる。しかし、「民家」という語もかなり多様に使われている。民俗学や建築史学の上では、それは「伝統的民家」と同義であり、「現在の・普遍的なものよりも、過去のものの残存形に強い執着をもって」（佐藤 1957）使用されてきた。従って、町家という語も、一般に古いマチバの民家、例えば京や江戸の街に建てられていた家々、あるいはその残存形、といった様な特定のイメージで考える場合も多い。本稿で取り上げる対象は、主に都市の商業地区の街路に面した民家であるが、これらは恐らく一般的に「町家」と称して差し支えないと思われる。ただ、ここでは、その中の古い民家のみではなく、現在の街並みの構成を識る意味から、新しい家屋をも含めて街路の一定範囲内の民家全数を取り上げた。

従来、町家に関する研究は農村民家に比べ比較的少ない²⁾。近年の研究、特に上田篤を中心とするグループ（生活空間学研究会）の一連の「まちや研究³⁾」等によって、町家に関する知識は著しく増えてはいるものの、多くは散発的なモノグラフの城を出ず、また過去に目を向けたものがほとんどである。従って、現在の街並みを構成している種々の町家のタイプの認識については、まだ研究の余地があらう。

ここで不充分ながら、町家（一般的に町家的と思われるもの）のタイプに関する先人の言及を振り返ってみると、まず地理学においては、藤田元春（1925, 1927）が妻入りの町家について言及して以来、妻入り、平入りの別、さらには道路に対して妻向きか平向きか、ということが町家のタイプとして注目されてきた⁴⁾。例えば、富田（1949）は、宮城県増田町を例に、妻棟、平棟を区別

し、さらに妻棟街村なる語を使っているし、また佐々木（1951）は陸奥東部の集落（都市的なところも含まれる）に関して妻入り民家、平入り民家について述べ、さらに小野（1953）は切妻妻入りが「町屋」として各地に見られることを指摘している。以上は必ずしも町家のタイプを分類しようという試みではないが、同じ考え方に立って木村（1973）は、山形県の民家につき、「町屋」の形態を平入横屋、平入縦屋、妻入縦屋⁵⁾の3類型に分け、それらと敷地間口の長短との関係を論じている（p. 42）。

建築家では、石原憲治（1932）が日本の民家を農家、商家、住家の3つに大別し、それぞれについて間取りの系統を細分、そのうち、商家については一列片土間、二列片土間、二列中土間、三列片土間、三列中土間、一列、二列、三列の9系統に分けている。また、全体としての造型に関しては、例えば斎藤（1950）は土浦市の民家について「商店として最も多い形は、切妻・妻入り・瓦・2階であり……寄棟・妻入り・瓦・2階の形式が多少これに混在する」と述べ、さらに小倉（1955）は「屋敷幅一杯に店を平入にたてて……」、「店を2階建にし、前面に底小舞をおろしているのは古い町家の一般の形式になる」と述べている。さらにタイプ分類の色彩の強いものとしては、木村（1973）が、山形県の「町屋」の「つくり」の分類として、直屋造、鍵屋造、店屋造（店部と居住部が独立棟を持ち、棟が直角に交わるもの、L字状、反L字状、T字状、逆T字状が有る）を区別している（p. 101～106）。

以上の諸例のうち、タイプ分類を一応指向しているものについて、そのための指標を整理してみると、藤田、富田、佐々木は妻入り、平入り（あるいは妻向き、平向き）、木村（p. 42）は妻入り、平入りと妻向き、平向き（この場合、両者の概念は区別されている）、石原は平面形態、さらに木村（p. 101～106）は棟形態と棟複合、ということになろう。指標がこの様に様々なのは、町家の形態がそれだけ複雑な存在であることを物語るが、もちろん以上の例によってそれを尽し得たわけではない。例えば、上記のうち、棟の複合に触れたものは、木村の店屋造のみであるし、2階部と1階部の棟の組み合わせにつ

いての言及は見られない。しかし、観察する限りでは、それらの事実もまた町家の形態の主要な特徴の一つとなっている。

上記の諸例は、石原を除けばいずれも地方的(局地的)な研究であり、諸タイプの広域の分布に関する資料という点では、きわめて手薄である。また、小地域内においても各タイプの数量的把握やそれによる街並みの構成の問題に関しては決して十分ではない。それは、現地調査以外に資料収集の手段が手軽に得られなかったことその他に、何よりも厳密な構成の把握を前提としたタイプ分類への試みという形態学的な関心が欠如していたためではないのだろうか。我々が本稿で目指すところは、種々のタイプの町家からなる現実の街並みの構成の問題に、新しい知見をつけ加えることにある。

2. タイプ設定と調査地域

本論では、棟形態と棟複合によって決定される家屋の平面形のタイプ(以下家屋タイプと呼ぶ)に注目し、特に2階部と1階部の棟複合からなる家屋については、第1図(基本形のみ)の如きタイプを分類した。これらは、調査地域の町家に見られる主要ないくつかのタイプを取り出したものであり、厳密な形態類型設定を意図し

第1図 町家のタイプ分類

たものではない。

調査地域は、第2図に示した如く仙台市街地の町家の並んだ街路8区域、さらに比較のため、その周辺部の集落から3区域を選んだ。このうち仙台市街地区の区域(第2図1~8)は、仙台周辺市街地の商店街とでも言うべき通りで、戦災に遭わず古い商家が比較的多く残っているところである。今市、利府は、仙台郊外のマチバ的なところで、石巻街道に沿って家屋が並び街村状を呈している⁹⁾。荒浜は阿武隈川河口の漁村であるが、家屋が密集しマチバ的な感じになっている。今市、利府、荒浜の家屋には、農家、漁家的なものも含まれるが、ここでは対象に含めた。なお、対象家屋は上記街路の通りに面した民家(公共建物、寺社、工場、付属建物を除く)全数で、総計1889軒⁷⁾である。

第2図 調査区域

- 1 通町 2 宮町 3 原ノ町 4 鉄砲町 5 二十人町 6 田町 7 連坊小路 8 荒町
9 今市 10 利府 11 荒浜 S 仙台駅 R 利府駅

1 判読例と正読率

本研究では、国土地理院 10,000 分の 1 の空中写真 (1961 年) を 2 倍に拡大 (5,000 分の 1) して使用し、家屋タイプの判読にあたっては、これを実体鏡 (TOPCON) によって接眼倍率 3 倍にして実体視した。さらに、鉄砲町と田町 (一部) については、現地調査を併用して写真判読の正誤を確かめた。

次に正読率を数量的に見る。一口に正読率と言っても、何をどこまで判読するかによって異なってくるので、こ

第1表 階数判読正誤 (判読屋根部分数)
() 内: 構成比

正誤	2階 1階	鉄 砲 町		田町 (一部)	
		75	174	22	62
		99	(91.6)	40	(77.5)
誤読	2階→1階	7	(3.7)	12	(15.0)
	1階→2階	13	(6.9)	4	(5.0)
	判読不能	6	(3.2)	2	(2.5)
計		190		80	

ここではいくつかの項目に分けて考える。第1表は、屋根部分についての階数判読の正誤である。田町で正読率がやや低いのは、軒高の低い2階屋を1階と読み違えた例が多いためである。第2表は、屋根部分の屋根型の判読正誤を屋根材料別に見たものである(屋根材料は、現地調査によったので、数字は現地調査による屋根部分数であり、写真判読によった第1表の総数と一致しない)。正読率は、全体として90%に近いが、トタン葺の屋根でやや落ちていることが注目される。これは、瓦葺屋根では、多くの場合棟瓦を乗せているため、写真上で棟線がはっきり見えるが、トタン葺屋根の場合は棟線が不明瞭になるためと思われる。また、特に黒タール塗のトタンの場合は、全体にコントラストが落ちるため、“読みおとし”も多くなる。第3表は、階数、屋根型、棟配列の組み合わせによる家屋タイプの正誤である。現地との照応可能だった判読家屋のうち、完全に各項目とも正読だ

第3表 家屋タイプ判読正誤 (判読家屋数)

棟配列	屋根型	階 数	鉄砲町	田 町
正	正	正	61	23
正	正	誤	8 (1)	9
正	誤	正	4 (2)	1
正	誤	誤		1
棟 配 列 誤	棟形態誤読		5 (3)	3
	棟数不足		16 (5)	6 (1)
	棟数多		4	
	判読不能部分含		4	
	戸数誤読		3	
とりこわし(空地、駐車場)			18	7
建てかえ			20	13
ビル			9	3
照応不能			1	3
計			153	69

ったものは、鉄砲町で58.1%、田町53.5%であり、これに微細な誤り¹²⁾を正読に含めると、鉄砲町68.6%、田町55.8%となる。家屋タイプとしての正読率は以上の如く決して高いとは言えないが、ここで第1図の諸タイプについての正読率¹³⁾を見ると、鉄砲町でA₀(A'含、以上同様)が95.6%、A_k80.0%、A_m84.6%、B100%、他は数が少ないがC2軒中2軒正読、D2のうち2、田町ではA₀77.8%、A_m3のうち3、B2のうち2(他は照応できるものなし)、となり、問題とする

第2表 屋根型判読正誤 (現地調査屋根部分数)

			鉄 砲 町				田 町 (一部)			
			カワラ	セメント ガワラ	トタン	その他	カワラ	セメント ガワラ	トタン	その他
正読	切	妻	99	2	35	3	45	3	17	18
	寄	棟	29	132	2	38	1	47	1	(85.7)
	入	母	2	(88.2)		(58.5)	1	(92.2)		
	片	流れ	2		1					
誤読	寄	→ 切	1							
	入	→ 切	1							
	片	→ 切	1		7					
	片	→ 平	1							
	その他	読みまちがい	5		5		1		1	
	読みおとし		8		11		3	1	2	
	判読不能		1		4					
計			150	2	65	3	51	4	21	

諸タイプについてはかなり高い正読率をあげ得たと見做せよう。

2 空中写真判読の問題点

イ 現地調査との関係

写真判読は、現地調査と完全に切り離しては行ない得ず、現地調査における知識が判読の内容をより豊かにすることは、高崎ら（1966）も指摘する通りで、民家研究においても例外ではない。本稿では、予備調査その他から、①町家は単一棟家屋のみではなく、複合棟家屋がむしろ一般的である。②特に、2階部と1階部の組み合わせからなる複合棟も普遍的に存在する、③道路に面した家屋の前面には看板や壁面の延長があり、屋根の上方に延びている、の3点に特に留意して判読を進めたが、写真像から、家屋形態を頭に描ききれなかった場合も多かった。

ここで、現地調査との関係における写真判読の役割を考えてみると、民家研究においては、写真が現地調査では得られない資料（例えば、地形分類図作成における色調から判断する土壌の性質等）をも提供するという面はあまり考えられない¹⁴⁾。とすれば、やはり、空中写真の持つ調査の簡便性、特に広域の調査におけるそれが、民家研究においてもクローズアップされようが、その場合にも、現地と写真との十分な対応を経てから広域の判読を行なうことが肝要となろう。また、比較的狭い地域内においても、民家（特に町家）は密集して分布する存在であり、対象を多数かつ短時間に分析するためには、空中写真の利用が便利である。いずれにしても、空中写真はその得失をよく理解して使用すれば、民家研究においても、現地調査とはまた異なった独自の役割を果し得るのではないかと期待される。

ロ 空中写真の縮尺と判読の限界

立川（1973）の言う「点的写真像のなかに質的ちがいを判読」する段階で引用されている使用写真の縮尺は

1/2,500 と 1/6,000 を4倍引伸し = 1/1,500 であるが、本研究（1/10,000 を2倍引伸し = 1/5,000）や立川自身の例（1/15,000）の様に、Stereotope その他で接眼拡大すれば、より小縮尺でも同じ段階が可能であると思われる。しかし、この場合写真像の限界ぎりぎりまで判読しているため、写真の鮮明度が判読に大きく影響してくる。ちなみに、我々の判読では写真周辺部に至ると著しく判読が困難になったし、また荒浜の写真（この場合のみ1/20,000を4倍に拡大）は、やや鮮明ではなかったため判読を諦めている。また家屋の種々なタイプを構成すると思われるいくつかの要素についても、今回は判読していない。例えば、庇、下屋の屋根（下屋庇）は家屋タイプの要素から除いているし、屋根材料も考慮していない。しかし、これらの判読については、我々の用いた縮尺においてもある程度可能であると思われるので、今後の課題として残したい。いずれにしても、民家調査のために大縮尺の写真を利用できる場合は限られていると思われるので、比較的小縮尺の写真による民家形態判読技術の検討がさらに望まれよう。

4 街並みの構成 ——各タイプの出現数——

第4表は、第1図の諸タイプの出現数及びその戸数に対する割合を各街路別に示したものである。数字は、通町～荒町までが空中写真判読によったもの（従って1961年）、今市及び利府は1972年8～9月、荒浜は1974年9月の現地調査によったものである。なお、鉄砲町に関しては現地調査（1974年9月）による戸数をも示した。

表を見るに、まずA₀は、仙台周辺市街部ではどの通りでもある程度以上の割合（15～20%）を占め、これにA_k、A_mを含めると20～30%を越える。このA型は、仙台郊外に行くと、荒浜では高い数字を示すが、今市、利府ではかなり低くなる。その他のタイプを見ると、Bは今市、利府がやや低い他はほぼ5%前後、Cはどこで

第4表 各タイプ出現数（ ）内：各区域戸数に対するパーセント

	通 町	宮 町	原ノ町	鉄 砲 町	鉄砲町(現地)	二十人町
総 戸 数	205	119	223	153	125	132
A ₀ + A ₀ '	36 (17.6)	14 (11.8)	51 (22.9)	28 (18.3)	29 (23.2)	29 (22.0)
A _k + A _k '	3 (1.5)	1 (0.8)	3 (1.3)	8 (5.2)	9 (7.2)	8 (6.1)
A _m + A _m '	13 (6.3)	8 (6.7)	3 (1.3)	14 (9.2)	8 (6.4)	5 (3.8)
B + B'	5 (2.4)	4 (3.7)	12 (5.4)	8 (5.2)	7 (5.6)	4 (3.0)
C + C'	1 (0.5)	2 (1.7)	1 (0.5)	2 (1.3)		3 (2.3)
D + D'	3 (1.5)	3 (2.5)	6 (2.7)	3 (2.0)	2 (1.6)	5 (3.8)
計	61 (29.8)	32 (26.9)	76 (34.1)	63 (41.2)	63 (41.2)	54 (40.9)

第4表 (つづき)

	田 町	連 坊 小 路	荒 町	今 市	利 府	荒 浜
総 戸 数	97	156	181	165	176	157
A _o +A _o '	17 (17.5)	36 (23.1)	47 (26.0)	6 (3.6)	5 (2.8)	45 (28.7)
A _k +A _k '	4 (4.1)	7 (4.5)	7 (3.9)			
A _m +A _m '	5 (5.2)	7 (4.5)	7 (3.9)	1 (0.6)	3 (1.7)	7 (4.5)
B +B'	5 (5.2)	1 (0.6)	15 (8.3)	4 (2.4)	4 (2.3)	13 (8.3)
C +C'	2 (2.1)	4 (2.6)	2 (1.1)	6 (3.6)	10 (5.7)	2 (1.3)
D +D'	3 (3.1)	6 (3.9)	7 (3.9)	7 (4.2)	2 (1.1)	25 (15.9)
計	35 (36.1)	61 (39.1)	85 (47.0)	24 (14.6)	24 (13.6)	92 (58.6)

第5表 諸 タイプ 屋根 型 (全体)

2 階 1 階	切 切	切 寄	切 入	寄 切	寄 寄	寄 入	入 切	入 寄	入 入	そ 他	計
A _o +A _o '	237	36	2	9	3		24	2		1	314
A _m +A _m '	57	6	1	2	4		3			1	74
B +B'	54	3		3	5		7	1	1		74
C +C'	22	6	3	1	1				1	1	35
D +D'	40	3	1	6	5		7	2	5		69
計	410	54	7	21	18		41	5	7	3	566

もかなり少なく、Dは荒浜の15.9%を除いてほぼ2~3%といったところである。ここで地区別の特徴を考えると、A型の割合の高い通町~荒町、A、Dの高い荒浜、全体として対象諸タイプの低い今市、利府の3つのグループに分けられ、性格の異なる街並みでは異なった町家の構成の特色を示していることが注目される。

参考までに各タイプの屋根型を見ると(第5表)、どのタイプでも切妻(2階)一切妻(1階)が多く、全体としてほぼ7割を占める。その他では切妻(2)一寄棟(1)、入母屋(2)一切妻(1)が目立つが、このうち後者は多くが荒浜の例であり(Aの24のうち22が荒浜)、他では少ない。なお、A_kの表に面した2階は例外なく切妻(41軒)である。

5 A型町家について

最後に、特にA型町家について2.3の考察を述べて、今後の研究への資とする。

A型は、上述の様に、仙台市街地と荒浜で高い割合を示す。仙台市街の古い商店街を歩いて、平入り2階屋の商家がずらりと並んでいる様な印象を受けるのは、多くこのA型町家のためであり、その意味でこのタイプは、

仙台的街並みの景観像を構成する重要な要素の1つとなっていると言える。写真1に見る如く、同地の古い商家では、瓦葺切妻屋根を持ち間口いっぱいを店舗にしているのを多く見うける。一方、荒浜では、2階部を入母屋の屋根にし、2階部の前面に廊下をつける型が多く(写真2参照)、仙台市内のA型とはややその形態を異にする。

このタイプは、その形から考えて商店機能と関係が深いと思われる。そこで現地調査をした区域に関して、その区域の戸数に対する店舗家屋の割合(店舗率)を算出してみた(第6表)。表に見る如く、いずれの区域でも、全体の店舗率よりA型町家のそれの方が高くなっており、A型には店舗機能がより集中して現われると一応言えよう。しかし、住家的な家屋にもA型の形態を持つものがあり、特に荒浜ではそれが普遍的に見られる(写真2,3参照)。これは機能が異なっている、同じ形が現われるという点で興味深い。

A型町家の発生要因に関しては、論証する材料をほとんど持っていないが、地割形態との関係、内部の機能、建築の時代性¹⁰⁾等から考えていく必要がある。また特に、表を2階建にすることに関しては、家格表現的な要

写真1 A₀ 鉄砲町 写真2 A_m 荒浜 写真3 A₀ 荒浜

素を考えるのが有効かもしれない。いずれにしても、今後具体的な資料収集が望まれる¹⁶⁾。

終りに、このA型町家の名称について考えてみよう。木村(1973)は、前述の如く、店部と居住部が独立棟に

第6表 店舗率

	全 店 舗 率	A ₀ , A _k , A _m の 店 舗 率
鉄 砲 町	54.7	84.2
田 町	75.4	80.0
荒 浜	13.4	23.1
利 府	17.1	75.0
今 市	18.8	71.4

なっていて、棟が直角に交わる町家を「店屋造」と称している。これはここで言う A₀ 乃至 A_m と類似のものと思われるが、写真で見る限りこの「店屋造」は兩棟とも1階である。また、小倉(1955)には「平入の店を2階建にし……母屋は店を含めてL字型になる」という記載があり、本稿で言う A_m と思われるが、特に名称を冠していない。A型町家に関しては、建築構造や分布、さらに発生要因等がある程度明らかにされれば、何らかの名称をつけることも必要となろうが、それは今後の課題として、本稿ではそのタイプの存在に注目を促すに留める。

(1975.4.9受理)

注

* 本論は、東北地理学会 1974 年秋季大会(喜多方)での発表に加筆修正した。

- 1) 上田(1971)はそれについて、“都市の民家”“都市住宅”“店家(まちや)一あげ店(だな)をもった商家”“区画された区家(まちや)”“通り庭をもった連続住宅”等、広狭様々の意味があるとし、さらにその視覚的形態から“通りに面し、軒を連ねた都市の1戸建住宅”という定義を提唱している。
- 2) これは、「民家という語が、多分に Rural の住居、農民建築……に重点がおかれて使用されて」(佐藤, 1957)きたことに因るのであろう。
- 3) 1971 年より「都市住宅」に連載。
- 4) 妻入り、平入りと妻向き、平向きは同じ概念ではないが、道路に面した町家の場合よく混同して使用される。
- 5) ここで、横屋というのは平向き家屋、縦屋は妻向き家屋の意である。
- 6) この地域について筆者らは、そこにおける家屋の屋根を中心に詳細な家屋類型分類を行なったことがある(日本地理学会, 1972 年秋季大会, 於山形)。
- 7) この数字は、一部現地調査の他は空中写真(1961 年)による判読家屋数なので、実際の家屋数とは

必ずしも一致していない。

- 8) 家屋の他、ビニールハウス、ドリーネ、自動車等をこれに含めている。
- 9) 立川 (1973) は、同一の空中写真 (複写スライド像) を、3人で判読し正答率を比較することを試みているが、これは判読の個人差の有無・程度の確認であり、現地との照合が行なわれているという意味での客観性とは別の問題である。
- 10) 小川 (1938) によれば、この記号は今和次郎 (1930) が始めて用いたという：今、アルス建築大講座 XIV
- 11) この場合、写真判読の精度に合わせて微細な形態は省略してある (例えば、小突出部、庇、下屋庇等)。
- 12) 主に小突出部や後方の屋根部分についての誤りで、家屋タイプとしてはそれほど大きな相違がないと判断したもの。
- 13) 従って、階数と棟配列のみについての数字、屋根型は除いてあるが、屋根型の正読率は第2表の様にきわめて高いので、その影響は少ない。
- 14) ただ、看板等のため街路から屋根を見ることが困難なため混んだ町家の場合、上空からの写真が現地調査では得られない利点を持つということと言える。
- 15) ちなみに、荒浜では大正時代の火災で焼けた跡建った街並みが、今のA型の多い景観像を呈している。なお、A型町家は一般に古い家屋が多いが、新しく建ったと思われるものにも少数存在する (写真3はその例)。
- 16) 荒浜の場合、A型家屋について「船の出入りを見るため2階建にする」「冬の冷たい海からの風を避がり、後の居住部が暖かい」という古老の話があったが、これは事実としても荒浜のみの特殊事情

であるし、結果的な事柄なのかもしれない。

文 献

- 馬場由美子 (1970)：地理学的研究と空中写真 地理 15 94～98
- 藤田元春 (1925)：京都市内に残存せる古代の聚落 地球 5 360～371
- (1927)：日本民家史 刀江書院
- 石原憲治 (1932)：日本農民建築の研究 建築雑誌 46 輯 953～965
- 木村正太郎 (1973)：出羽の民家探訪 中央書院 285 頁
- 小川 徹 (1938)：東京府及び山梨県下に於ける屋根の型式を中心とした民家の調査 地理評 14 140～165
- 小倉 強 (1955)：東北の民家 相模書房 245 頁
- 小野芳次郎 (1953)：山形県最北地域の民家概観 東北地理 6 15～20
- 斎藤叶吉 (1950)：店舗の屋根 田中啓爾先生記念大塚地理学会論文集 169～173
- 佐々木藤吉 (1951)：東奥の集落 東北地理 4 12～16
- 佐藤甚次郎 (1957)：民家 (住居) 集落地理講座 1 巻 朝倉書店 167～186
- 立川稠士 (1973)：民家研究における空中写真利用上の2,3の問題 東北地理 25 16～22
- 高崎正義編著 (1966)：空中写真の見方と使い方—空中写真判読 全日本建設技術協会
- 富田芳郎 (1949)：旧宿場町としての名取郡増田町 東北地理 2 59～62
- 上田 篤 (1971)：<まちや研究シリーズ>をはじめるにあたって 都市住宅 37号 79

House Types along Urban Street and their Air-photo Interpretation —Case Studies in Sendai and its Environs—

Tadashi SUGIURA and Shigeo TACHIKAWA

The Japanese term "*Machiya*" means commonly dwelling houses in urban areas, and especially in a narrow sense it means commercial houses. In this paper the authors attempt to classify house types of *Machiya* and to enumerate them in some districts by using air-photos, and in addition, to discuss some problems of air-photo interpretation of *Machiya* and general house types.

(1) Some types of *Machiya* were newly classified as in Fig. 1 with the combination of house parts having each roof-ridge and their situations to the street.

(2) By using air-photos these types could be enumerated with fairly high exactitude. At this time, various information of house-form greatly contribute to correct interpretation

of photo-images. Air-photos can be one of the effective means for house type study when used with the understanding of its advantages and disadvantages.

(3) Some examinations of enumerating each Machiya type by using air-photos and in some parts making on-the-spot observations were made of several streets in Sendai, Imaichi, Rifu and Arahama, Miyagi Prefecture. As a result Type A is comparatively dominant in each street, and plays an important role in composition of the street landscape. Accordingly, it is further necessary to investigate its distribution, structural technique and various factors of forming this type.